

椀の肉する研究(才報) 木製吸物椀・汁椀の安定性について  
 聖母女学院短大家政 ○中瀬弄子 澤田寿々太郎

目的 日本の伝統的木製食器、食用具の多くは日常の食生活に利用されなくなり、次第に家庭から姿を消しつつある。しかし、吸物椀・汁椀は今日でも広く日常生活に使用されている。吸物椀・汁椀が淘汰されない理由は種々考えられるであろうが、材質的特性からみれば、熱伝導性・触感・耐久性等いくつかの諸点が挙げられる。一方、軽量化による安定性の問題があるのでは否かと考えられる。我々は椀の安定性に関心をもち、形状と安定性との関係について検討を試みた。

方法 計測に必要な吸物椀・汁椀は本学生活科学資料室の収蔵品を中心に55点を試料として選んだ。これらの試料はすべて明治時代から昭和初期に使用されたものである。各試料について、重量・内容積・口径・全高・深さ・高台径及び高台高をそれぞれ計測した。また、椀の安定性は次のような方法で測定した。即ち、水平な台上に静置した椀の上縁を垂直下方に引張って、椀が傾倒するに要した重量をグラム数で表わし、安定度の指標とした。この方法により、空の椀についての安定度( $St_1$ )と、椀の上縁面より15mm下まで水を満した場合の安定度( $St_2$ )をそれぞれ測定した。

結果、上記の方法により得た安定度と各計測値との間の相関関係を求め、安定度の要因を考察した結果、(1) $St_1$ に対し重量・高台径は相関関係が認められた。(2) $St_2$ に対して高台径・内容積・深さは相関関係が認められたが、口径・重量とは関係が少なかった。従って、空の場合と、水を満した場合の安定性にかかわる要因は異なる。